所報
島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町塩口24
電話2-9772

隠岐の島町の取組紹介

『隠岐びとの心を育む学校・家庭・地域の連携～ふるさとへの愛着と誇りを育む教育の推進～』
※隠岐びとの心
（隠岐を誇りに思う心、隠岐を大切に思う心、人を思いやる心、島に住んで幸せを感じる心）

「子供らのためなら！」

そう言って、学校の授業に参加してくださる地域の方がたくさんいます。

隠岐の島町では、ふるさと教育の目標を

とし、地域の「ひと・もの・こと」を活用した学習が各小・中学校で行われています。

近年は、地域の方に学校へ来ていただき、子供たちと、小グループや一対一で語り合う学習も増えてきています。

九月、都万小学校の五・六年生と地域の方が、都万の魅力について語り合う学習が行われ、子供たちは、都万の魅力や地域のよさをたくさん知ることができました。今後は、聞いたことをもとに探究課題を見つけ、課題解決に向けて学習を進めていくことになります。地域の方にとっては、子供たちから元気をもらったり、改めて都万のよさを考えたり、学校教育を知ったりできるよい機会になったようです。「子供らのために」と言っていた地域の方にも、実は学びがあるということです。

今後も学校と地域が連携し、隠岐の島町らしいふるさと教育が展開できるよう、また学校に関わった地域の方の思いが地域の活力に繋がるよう働きかけていきたいと思います。

（派遣社会教育主事　古木）

ワーク・ライフ・バランスの崩壊？　そしてライフワークの確立？

Aと出会ったのは、教員三年目二十六才の時でした（現在六十二才、体力なし）。諸事情のため、県外に住む両親と離れ、祖母の住むこの町に一人転校してきたのです。

一年ほど経った頃、Aの面倒を見てくれた祖母が亡くなり、再び実家に戻らなければならない状況となりました。喫煙、飲酒、無免許運転、深夜徘徊等、様々な課題はありましたが、徐々に笑顔も増え、生活リズムも改善しつつあったので、今後を思うと残念でたまりませんでした。

そんなある日、管理職に呼ばれ「来年度、Aの担任にならないか。そして保護者として、一緒に住んでほしい。」との言葉。「はっ？」とは思いましたが、本人の事情を考えると十分に理解でき「わかりました。」となったわけです。

担任で保護者、しかも一緒に下宿生活。今ではあり得ない事なのですが、結局、二・三年生時の担任として卒業を見届けました。

さて、当時の下宿生活を振り返ります。朝起こすことから始まり、朝食、学校での朝礼、授業、給食、そして部活動、勤務を終え下宿に帰ったら夕食、洗濯、お風呂、一日の終わりは強制的学習タイム。静かになった部屋を確認し、やっと自分の時間…。

とにかくずっと一緒の生活でした（今ならばあってはならないことですが、ワーク・ライフ・バランスはすでに崩壊していたように思います）。言葉で言い表せないほどしんどい時もありましたが、感動が二倍三倍になるような出来事もありました。涙、涙の別れの日は今でも忘れることができません。

Aが社会人として「自立」している姿を思い描き、教員として親としてどう関わるべきかを模索した時期でした。申し訳ないくらい失敗だらけの毎日でしたが、教育に対する考え方や捉え方の土台ができた時期であったと思っています。

今考えると、私の先生は『A』だったのかも知れません。日々生活の中で、親（大人）として、教員としてどう振る舞うべきなのかを考え、いつも自分を振り返らせてくれました（おそらく、この時期にライフワークが確立されたように思います）。

そして、あの頃から自分に言い聞かせながら仕事をしていることがあります。それは「熱い思いを持つ」「とことん関わる」「思いをしっかり受け止める」の三つです（自分から相手を見ようとしなければ、何も見えないということなのかも知れません）。

昔の話はさておき、肌寒い季節になりました。先生方には授業や行事の疲れが溜まっているのにも関わらず、訪問の際にはいつも笑顔で迎えていただき本当に感謝しております。熱心に仕事に打ち込む姿、皆さん素敵です。

（派遣指導主事　永島）

一人一人が輝く社会

昼休みに時々散歩をしていると毎回同じ場所で「先生」と声をかけて手を振ってくれる方がいます。ずいぶん前になりますが、高等部二年生の時に担任をした方です。その方は高等部卒業後新聞配達の仕事をしています。今年のような猛暑の夏にも日中の一番暑い時間帯に毎日自転車で新聞を配達しています。「暑いねえ」と言いながらもいつも笑顔で各戸に新聞を届けています。その笑顔と働く姿に毎回元気をもらいます。また、清掃の仕事をしている特別支援学校の卒業生に出会うこともあります。手際よく床の清掃やゴミの仕分けをしている姿は、その職のプロだなあと感心し思わず目で追い続けてしまいます。

先日、保護者の方と一緒に特別支援学校高等部の見学をする機会を頂きました。特別支援学校では、地域との連携が充実し地域の企業と共に製品作りをしたり、公共施設の清掃を請け負ったりする等の取組が行われていました。学校内にあるカフェやショップには、たくさんの地域の方々が来校し利用されていました。また、高等部では現場実習を通して職場の方に生徒を知っていただくことで、一人一人の良さを生かした就職へと繋がっています。このような特別支援学校の取組は、しまね教育魅力化ビジョンで掲げる「一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会」を実現させるものだと実感しました。

（文責　岡本）